ISSN 0285-5593

近きに在りて

—近現代中国をめぐる討論のひろば—

第55号　特集：近現代中国の農村社会

巻頭言……弁納才一　1

[特集・論文]

中国内陸農村調査の計画と現実……三谷　孝　2

中国華北農村社会と副業……浜口允子　8

消えた村の小学校の記録
——1990年代後半華北農村調査——……笠原十九司　21

運動史研究の深化と地域社会史との結合
——韓国における中国近現代三農史研究——……柳　鏞泰（鶴園　裕訳）　33

太湖流域漁民の「香頭」と「社」「会」
——華北農村調査との比較試論——……太田　出　45

民国期江南の廟会組織と村落社会
——呉江市における口述調査を中心に——……佐藤仁史　57

中国家族の関係的・実践的側面と
女性の「社会圏子」からみる地域社会……首藤明和　71

村民自治における国家・村組織・村民の競合関係について……張　文明　82

生活空間の重層性から中国農村研究を考える……小島泰雄　91

村の秩序と村廟……田中比呂志　98

水権から見る村落と国家権力……祁　建民　104

水利・土地利用から見た湖北省農村の社会関係資本……阿古智子　112

道作りと社会関係資本
——中国中部内陸農村の公共建設——……田原史起　121

編集後記……132

2009・5

道づくりと社会関係資本
—中国中部内陸農村の公共建設—

田原史起

はじめに

同じ「中国農村」といっても、東部（沿海）、中部（内陸）、西部（内陸）の間の落差は非常に大きい。筆者がこれまでコミュニティ・スタディの手法を用いて農村公共建設の取り組みを描いてきた北京郊外と山東半島の二つの事例[1]は、いずれもが、ある程度の条件に恵まれた東部沿海地域の事例に属する。北京X村では1000万元規模の資金を投じての野菜卸売市場が村リーダーにより形成されており、山東C村では同様に、村の農地に張り巡らされた水利灌漑システムがリーダーたちにより形成されていた。

他方で、内陸農村は東部沿海農村のようなコミュニティ共有財産の基礎が弱く、沿海部への出稼ぎで人材流出が進み、コミュニティを取りまとめるリーダーが不足している。同じ「内陸」地域にあっても、西部の場合は1990年代からの「西部大開発」に見られるように、公的財政からの農村への投入増加が目立ってきているが、そうした条件にも乏しい中部農村は、言ってみれば、「自力更生」で、公共建設はゼロからのスタートとなる。必然的に、中部内陸農村では、コミュニティごとの内在的条件が公共建設の成否を決定する度合いが高かった。「内在的条件」とは、端的に言うと、第一にリーダーの有無、第二に村民の大多数が公共建設を自分自身の事業と見なし、自発的にまとまりを形成して公共建設の主体となることができるか、ということである。

実際のところ、中部内陸農村の停滞を伝える事例には事欠かない。賀雪峰ら一部の研究者が指摘するように、中部内陸地域の農村の社会関係はバラバラな—「原子化」—状態にあるともいわれる[2]。彼らの主たるフィールドである湖北省荊門市では、一方では宗族に代表される伝統的な人間関係がすでに消失しており、他方では市場経済に基づく新しい人間関係は形成されておらず、そのため誰もが自分の小さな家庭の利益のみを顧みて団結せず、村落生活が立ちゆかなくなっているというのである。コミュニティ住民を結びつける紐帯の解体現象は、公共建設の停滞を招き、地域経済の発展速度に影響を与えるのみならず、社会治安や老人扶養問題などにも及ぶ社会問題発生の原因ともなっているという。

それでは、中部内陸農村には全く希望はないのか。どれほど人間関係がバラバラに見える農村でも、農業を基盤に成り立つコミュニティである限り、人々が結び付き、まとまっていくような「社会関係資本」がまったく存在しない、ということは考えにくいのではないか。こうした問題意識の下に、筆者らは2006年から実際に中部内陸農村の湖北省と江西省のそれぞれ一村落を調査地に選んで観察を行ってきた[3]。筆者が担当した江西H村[4]は、確かにバラバラで凝集力が無く、停滞しているように見えた。しかし注意深く目を凝らしてみると、北京や山東と比較すれば遙かに微細な動きではあるが、村民が自力で行う「公共建設」が確かに存在していた。訪問を繰り返すうち、H村の社会的文脈においてとりわけ重要に思えてきたのが、公共財としての「道」、しかも集落と外界を結びつける数百メートル単位の道の存在である。小論では、こうしたミクロな「道づくり」を題材として、いったいどのような条件の下でそれらが可能となっているのか、その背後にある「社会関

係資本」(social capital) の観点からいくつかの指摘を行いたい。

「社会関係資本」とは、ある社会やコミュニティの発展をもたらすところの「非経済的」な資本—信頼、規範、ネットワークなど—を指す。よく知られているように、社会関係資本は「文脈限定的」かつ「目的限定的」概念である[5]から、あるコミュニティにおける特定の社会的文脈のもとでプラスに働いた社会関係資本が、別の状況下で常に有用であるとは限らない。また「道づくり」については有用に働いた社会関係資本も、別の目的について有用であるとは限らない。小論においても、性急なモデル化は行わず、まず「道づくり」の立ち上がってくる社会的文脈を丹念に採取することに重点をおきたい。

1．H村の出稼ぎ経済

(1) 村の概況

江西省余干県は鄱陽湖の湖畔に位置しているが、H村の属しているＳＧ郷は県城から50キロほど離れた東郷県との県境にある。H村は、ＳＧ村に管轄される18行政村の内の一つである。[図1] を見れば分かるとおり、H行政村は14の集落から構成されている。江西農村の丘陵地や山間地に共通した特徴として、H村を構成する集落の規模は小さく、分散している。筆者は第1回目の訪問時に全ての集落を実際に歩いてみたが、集落と集落の間の距離は遠く、細い畦道でつながっているために頻繁な行き来には向いていない。14の集落を一つの行政単位として取りまとめることの難しさは、よい道の欠如によって増幅されている。これは実際に徒歩で廻ってみた感覚からも明らかであった。

(2) 村を取り巻く「道」

省都南昌と万年県を結び、余干県の北部を東西に貫通する「昌万公路」が2004年6月に開通する以前、余干県城から西に向かうルートは鄱陽湖周辺の無数の湖沼や湿地に阻まれていた。省都の南昌に出るには、県民は南の県境を越えて東郷県、進賢県、南昌県のルートを使って迂回し、現在の数倍の時間をかけなければならなかった。昌万公路の開通後、南昌へは車で二時間ほどの距離となり、「南昌への出稼ぎ」という選択肢が農家経営の戦略のなかに持ち込まれることになったと思われる。「昌万公路」を除き、県内を通過する大きな道は、磁器の生産で名高い景徳鎮から南下してＨＪ鎮を通過し、鉄道駅のある鷹譚につながる道、すなわち国道206号線（〔図1〕の道路A）である。ＨＪ鎮は現在、国家レベルの発電所が建設されており、県城を除く県南部の経済中心地として発展しつつある。現在の道路状況を図示した最も詳しい『余干県地図』（2005年）の区分によれば、ＳＧ郷からＨＪ鎮に至る道（道路B）も「主要な自動車道」と記されている。この道も100%国家財政に拠って建設・管理されている。

以上に見たような大きな道は上級政府が投資・建設し、管理する道路である。それ以下の道、村々と主要道を結びつける道の建設・管理は、少なくとも1990年代まで、ほぼ完全に農村住民の「自力更生」に委ねられてきた。H村周辺の農村住民がより頻繁に使用する道は、[図2] に示した（C）、（D）、（E）、（F）、（G）、（H）、（I）などで、これらはインフラの中でも最も末端に近い部分として、比喩的に「毛細血管」と呼ぶことができよう。地図上ではその下に「小路」も記されているが、（E）、（F）、（G）などは地図上に表示されておらず、いずれのカテゴリーにも含まれない、正真正銘の毛細血管といえる。我々がここで検討したいのは、こうした道とコミュニティの関係である。毛細血管の建設、維持・管理は「コミュニティ」の変数に大きく規定される。

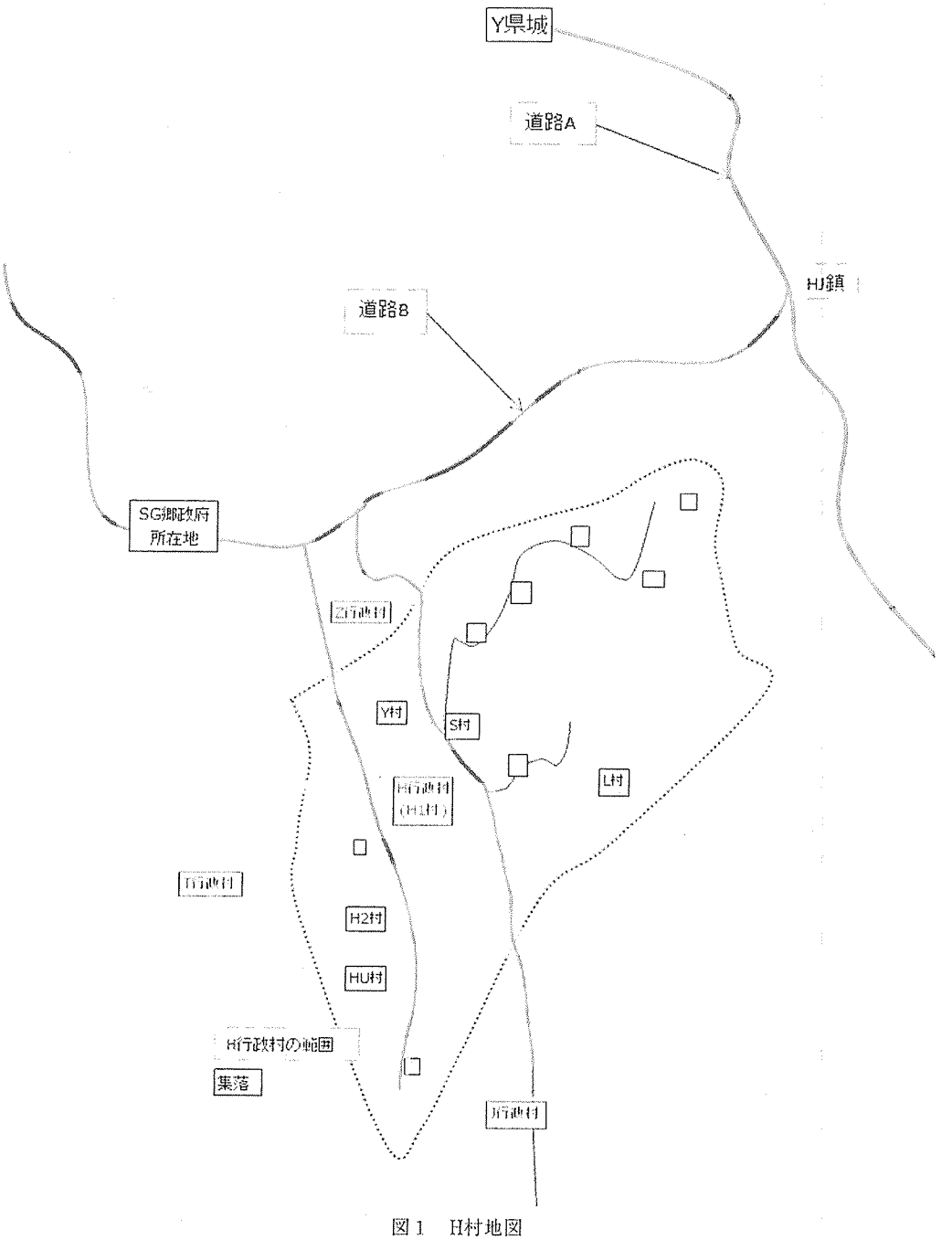

図1　H村地図

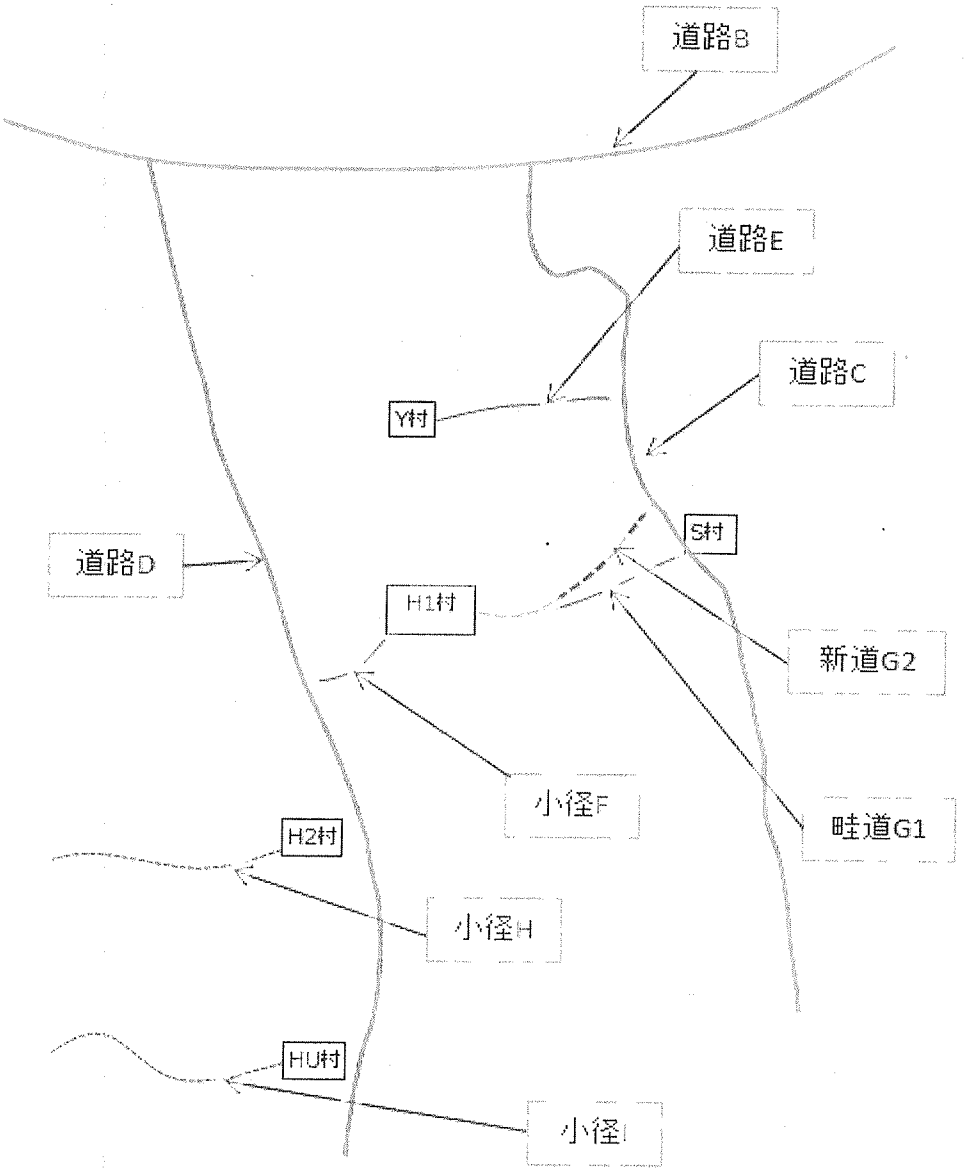

図２　Ｈ１村周辺拡大図

（３）出稼ぎ経済

以下では、Ｈ村を構成する14の集落のうち、筆者の観察した道づくり事例に関わる３つの集落について概観しておこう。

①Ｈ１村

Ｈ１村はＨ村の中心集落であり、ＳＧ郷の郷政府所在地からの距離は２キロあまりと比較的近い。筆者自身による世帯調査の結果に基づけば、2007年現在のＨ１村は88戸、443人で構成されている。水稲以外の経済作物は皆無で、青年層の男女、壮年層の男性はほとんど出稼ぎに出ている。全村人口の内、在村人口が199人（45%）、他出人口244人（55%）となっており、外出している244人のうち、初級中学、高級中学などでの就学を目的と

したものが43人含まれているため、外地就業者数は201人となる。これは村の人口の45%に相当し、県の平均[6]に比べてもかなり出稼ぎ率が高い。さらに就業地点についてみてみると、201人のうち、就業地点が不明な37人を除いた164人の内訳は、大きく分けて、浙江で就業する村民のグループと南昌で就業するグループでその大半を占めている。この二つのグループは出稼ぎの性質においてやや異なっている。第一に年齢であり、浙江のグループで年齢の特定できた46人の平均年齢は27.8才で、南昌グループは43.4才となり、異なる年齢層の人々であることが分かる。第二には就業の性質であり、浙江への出稼ぎ従事者は裁縫関係がほとんどであり、工場における正規労働者が多いのに対し、南昌グループは臨時性の強い建築現場などでの日雇い職（散工）がほとんどである。第三に家庭内での地位についていえば、浙江グループは世帯主が10%しかいないのに対し、南昌グループでは67%に達する。第四に男女比率でも、浙江グループでは男性が59%にたいし、南昌グループでは79%を占める。

これだけの簡単な数字をもって結論を出すことはできないが、Ｈ１村の他出人員と地元コミュニティとの関係について、一つの推測を行うことは可能である。

南昌で臨時姓の強い仕事に従事しているのはおよそ40代前半の年齢層を中心とした世帯主の男性が多く、老父母などの面倒を見る必要があるために帰郷して家族の世話をする頻度が高い。昌万公路の存在により、南昌からであれば、月に１回程度は帰郷するのが可能である。南昌グループがコミュニティを離脱する程度は、浙江グループほど高くない。年齢層から常識的に判断して、南昌グループの学歴は浙江グループほどではなく、いわゆる「事業意欲」のようなものも高くないはずである。もしも村内で比較的簡単な副業機会が創出されたなら、彼らは不安定な出稼ぎよりも家で副業をすることを選択するであろう。

浙江の服装工場で働くグループは20代後半を中心とする人々で、女性も多く含まれ、世帯主ではない者が多い。老父母はまだ健康で、逆に幼い子供たちの面倒を見てくれている。彼らは年に一度、春節の時に数日間、帰宅して子供に会う。まだ若いので、一定の「事業意欲」をもっているが、永遠に都市に残って都市の人間と競争してゆける自信はもっていない。したがって、もしも村の中に「事業意欲」をある程度まで満たしてくれる副業の機会があれば、このグループも帰郷して事業に従事することにやぶさかではないだろう。

②Ｓ村

Ｓ村は戸数30戸ほどで、Ｈ１村からの距離は畦道（Ｇ１）を通ってわずかに300mほどである。だがＳ村の出稼ぎ経済のあり方は、Ｈ１村とは様相を異にしている。20代、30代の青年男女がほとんど外地に出ている点は共通している。Ｈ１村と同じく目的地は浙江で、裁縫に従事する者が多い。他方、Ｈ１村でもＳ村でも、50代の層は基本的にどこでも村に残っている。Ｓ村の他出状況のＨ１村との違いは、Ｈ１村では南昌に出ていた40代の男性グループが在村である点にある。Ｓ村では南昌に出るものは少なく、わずかに一人だけである。40代の男性は村にいて何をするのかといえば、その多くが副業として左官屋[7]をしているのである。大工と左官はＳ村の「伝統」のようなものである。この伝統の存在により、Ｓ村の40代は出稼ぎが大きな潮流となっても全ての者が村を出る必要がなかったものと思われる。

Ｓ村で大工や左官が副業となりうるのは何故か。「伝統」以外の要素で考えると、この村が比較的大きな道（Ｃ）に接しているのが一つのポイントだろう。大工・左官の仕事現場の範囲はおよそ３kmほどだという。毎日現場まで往復しなければならない。40代の人間が村にいて大工や左官の仕事が出来ることと、比較的ましな道（Ｃ）が村を

貫通していることと関係があるだろうか、と筆者が尋ねると、ある左官の奥さんは「道がなくて何ができるの」と当然のように言い放った。

③Y村

Y村は33戸、140人ほどである。後述する道路（E）ができる以前のY村の交通条件はH１村と大差がなく、道路（C）に出る為に水田の畦道を通らねばならず、S村のような副業展開には不向きであった。Y村の１人あたり耕地面積は1.2畝ほどしかなく、農家の主要な収入源は出稼ぎで、就業先は広東、福建、浙江、江蘇などに分散している。Y村の「強み」は、何XDというSG郷の退職幹部が存在することであり、同村が新農村建設のテスト・ポイントに指定されたのも、集落の戸数が少なくて資金投入の効果が現れやすいことと並んで、退職幹部の存在が大きかったと村民たちは信じている。

2．H村の道づくり

以上を踏まえ、本節では、H村を取り巻く様々な「道」をめぐる小さな物語に注目してみよう。

（1）見捨てられる道路（D）

『余干県地図』で（D）は「大車路」（荷車が通れる道）と表示されている。しかし、この道はすでに悪路と化している。かつて村民により補修されたこともあった。2004年にはH村の範囲で、この道を利用する集落の村民が、請け負っている水田１畝につき100元の資金を出し合い、土を盛って道を高くすると同時に、砂利を敷き詰める工事をしたのである。耕作放棄をして出稼ぎに出たりしている者は金を出さなかった。2006年５月に筆者が初めて村を訪問した際、降雨の後ではあちこちに水たまりができており、早くも崩壊が始まっていた。H村で農業税は2004年まで徴収され、2005年には廃止されたので、その最後の年に村民

図３　降雨後の道（D）

への割当金を課した形になる。全国的傾向であるが、農業税廃止以降は、村の幹部が村民からの資金徴収を行うに当たっては、必ず「民主的手続き」が必要とされるようになっており、資金調達の手続き上の難易度は増している。

その一方で、2005年以降は道づくりについて国家資金が投入されるチャンスは増しているようである。ほどなくして（D）の補修についての国家補助の話が持ち上がり、2006年の11月と2007年の前半に、費用負担についての話し合いがもたれた。（D）の道１キロをコンクリート化するのに20万元が必要である。そのうち国家が14万元を補助し、住民側の負担は６万元という。HU村までだと４キロあるので合計80万元、住民の負担分は24万元となる。沿線に位置するH１村、H２村、HU村の３つの集落を合わせて約200世帯で、世帯あたりの平均負担額は1200元である。H１村でも集会を開いて討論したが、1200元の負担は重過ぎるということで、賛同を得られなかった。H２村、HU村でも同様の結論で、建設案は白紙に戻った。こうしてその後、（D）の荒廃はさらに進んでいる［図３］。

（D）の補修という根本的な解決は困難となってきたが、上記の話し合いからほどない2007年９月、H１村と（D）とを結ぶ新しい小径（F）が造られた。これは村長である何BYが発議し、元々

の畦道を拡張して作ったもので、長さ100メートル、幅4メートルほどの道である。もちろん舗装道路ではなく、砂利と砂を購入し、ブルドーザーで均して一日で完成したという。費用は、2,000～3,000元程度だが、これにはＨ１村所有の山の樹を18,000元で売却した際の利益の中から支出した。2006年の夏頃、村長の家の前で集会を開き、大衆の同意を得て共有林の樹木を伐採、売却することがとり決められた。その目的はただ単に利益を皆に分配するということだった。ところが、これがいつまで経っても配分されない。村民の一人が村長に文句を言いに行ったが、とりつく島がなく、「大金でもないし、まあ仕方がない」ということになっていた。村民の間では、村長が木材の収入の一部を自らのポケットに入れたのではないかという憶測や噂がささやかれていた。この種の噂はＨ村では非常に多いが、こうした噂が飛び交うこと自体、村長の「信頼の危機」を示している。逆に見れば、村長が木材収入の一部を用いて（Ｆ）の建設に踏み切ったことは、村長の「信頼回復」の狙いがあったと考えられる。

村長にとって不運だったのは、前述の通り（Ｄ）の状態が非常に悪くなっており、今後も補修される見通しは立っていないために、そこに連結された毛細血管である（Ｆ）の利用価値もさほど高くなかったことである。2008年段階では、むしろ道路（Ｃ）の株が上昇してきており、Ｈ１村民はむしろ畦道（Ｇ１）を通り、Ｃの道を通って村外に出かける、という具合になっている。外地へのアクセス手段としては、村と（Ｄ）とを結びつけるのではなく、新しい「毛細血管」を通じて（Ｃ）と結びつくことにＨ１村は期待をかけはじめていた。同じく（Ｄ）沿いにあり、Ｈ１村よりも奥にあるＨ２村、ＨＵ村なども現在はこの（Ｄ）を使用しているが、これらの村もＨ村と同様に（Ｄ）に見切りをつけはじめており、反対側のＴ行政村の道につながる小径（Ｈ）、（Ｉ）を整備しようとしている、との噂を聞いた。

（２）期待が高まる道路（Ｃ）

2005年、第十一期五カ年計画に関わる上級政府のプロジェクトとして、Ｊ行政村から道路（Ｂ）に結びつく道（Ｃ）に砂利を敷き詰めて路面状況の改善が行われた。路面状況は比較的良く、筆者らが車でＨ村に入る際も、（Ｄ）は通らず、この（Ｃ）を通るのが習いになっている。2008年３月の第４回訪問時、この道路をさらにコンクリート化する工事がまもなく着工されるとの風評が流れていた。実際、同年９月に筆者が研究協力者の何氏に連絡を取った段階で、すでに舗装工事は実施され、道は完成したと聞かされた。こうして道路（Ｃ）の株が上昇するにしたがって、周囲の集落と（Ｃ）とを結ぶ「毛細血管」の建設・整備が周辺村民の念頭に上るようになった。

①Ｈ１村畦道（Ｇ１）の補修

Ｈ１村にとっては、村と（Ｃ）とを結ぶ毛細血管、すなわち畦道（Ｇ１）が問題となってくる。これは「道」というよりも、水田の畦を人が多く通ることによって自然に形成されたものであり、道幅は数十センチしかない。（Ｄ）の改善に期待がもてなくなった今、この（Ｇ１）が良くなれば、Ｈ１村からの外出は随分と容易になる。

こうした機運を受けたものであろう、2007年には二人の青年によって、Ｇ１には初歩的な舗装工事が施された。二人の青年とは、Ｈ１村の何ＪＴ（37才）とＳ村の舒医師である。何ＪＴは、かつて蘇州に５年間滞在し、自動車修理の仕事をしながら技術を身につけた人物である。そのうちに、人に使われる不自由さを感じるようになって、地元に戻ったが、村にではなく、商売の展開しやすいＳＧ郷の中心地に店舗を構えている。舒医師（30才くらい）は、人の良い笑顔の爽やかな青年である。父親はかつての「裸足の医者」だという。本人は江西省内の鄱陽県「衛校」（衛生学校）を

出て、医師免許を取って父の跡を継いだ。カメラマンが持っているような銀色のスチール箱を肩にかけ、患者の家から家へとバイクで飛び回って居る。携帯に電話が入ると村内でも、村外でも出かけて行く。舒医師は自身がバイクで各村を回らねばならないので、畦道（Ｇ１）の整備は自分の仕事のためでもあった。

彼らはおよそ300元ずつを出し合って、畦道に円い砂利を敷いた。その際にはＨ村の20人ほどが労働力を供出して、２日ほど作業を行って完成したという。雨天の日には、依然、やや歩きにくいものの、それでもかつてほどのぬかるみではなくなっている［図４］。

②Ｙ村の新道（Ｅ）の建設

（Ｃ）への期待は、Ｙ村を動かして、新しい200メートルほどの道（Ｅ）をもたらした。Ｙ村も元々は外出の際、曲がりくねった細い畦道を伝って（Ｄ）の方に出ていたのだが、（Ｅ）の建設によって外部へのアクセスが格段に向上した。前述した「新農村建設」により投入された外部資金は十数万元で、主として集落内の道路整備に使われたのであるが、それとは別の事業として、2007年の後半、集落と道路（Ｃ）を結ぶ道（Ｅ）の建設がＹ村の自力更生で行われた。工事費用は、道路13,000元、橋30,000元を合わせて43,000元ほどだった。Ｙ村では、まず村民から世帯人数ごとに割当金を支払わせる「集資運動」を行って15,000元を集め、これを土地の補償に充てた。しかごくわずかの反対者もいて、未だにすべての資金を徴収できていないという。「集資」の終了後に、募金運動を行った。それでも不足する部分はツケの方法も用いて工事を完成させた。集落の中に掲示してあった寄付金の金額は、最高で1000元、ＳＧ郷退職幹部の何ＸＤが500元、その他、一般的には200～300元程度が多く、合計では24組の寄付が出されていた。ということは、この小さな村のほぼ全ての世帯がいくばくかの寄付を出したことになる。ただし寄付の総額は10,000元にも満たない。

図４　補修された畦道（Ｇ１）

③Ｈ１村の新道（Ｇ２）の建設計画

筆者らのＨ村への第４回目の訪問初日、2008年３月22日の夕食時から話題に上っていたのは、Ｈ１村からＳ村につながる道と橋（Ｇ２）を造る計画がＨ村民の間で出ているということだった。Ｇ１の畦道を一部利用しながら、車両も入れる道幅５メートルほどの本格的な道路に造り替える計画である。これはＳ村村民の間でも知れ渡っていたし、Ｈ１村に行ってみると、村境にある石橋のたもとで洗濯をしている中年婦人たちも皆このことを知っている。どうしてこのような話が持ち上がったかといえば、2008年の旧正月に多くの出稼ぎ者が帰郷しており、そこでＳ村の村長とＨ１村の村長の、何ＢＹを含む８人で酒を飲んでいた際に、Ｓ村長がＨ１村長に向かって言った台詞に始まる。すなわち、上記のＹ村の道づくりの成功を引き合いに出して、「Ｙ村のような小さい村でも道が造れるのに、Ｈ村のような大きい村が道の一本も造れないのか？」と、いわば「けしかけた」わけである。Ｙ村の世帯数は約30戸、Ｈ村は約90戸、つまり３倍の規模がある。おなじ道幅・長さの道を自力で造ったとしても三分の一の負担ですむはずであるが、それが今に至るまで出来ないのはどういうことか、ふがいないではないか、ということである。さらに「もしも道を造るのだったら、Ｓ

図５　Ｈ１村とＳ村の協議の模様

村の田を少し潰してやってもかまわないぞ」と。Ｈ村からＳ村への畦道脇の田は、大部分がＳ村のものである。

この村長同士のやりとりは、その場にいた村民らを介して全村に広がり、道作りに向けての世論が形成されつつあった。なかで、上海の出稼ぎから帰省中であった若者は、自分はそのために10,000元を寄付しても構わない、と言い残して上海に帰っていった。ただし問題は、前述の集団山林の樹木販売に絡む疑惑など、村長の過去の行いから来ている「信頼の危機」である。筆者と研究協力者の何ＣＱは、村に滞在した数日間の間に、村長を訪ねて話し合いの機会をもったり、また若干の寄付を申し出るなどしたこともあり、道づくりの計画にはいくつかの進展があった。第一に、Ｈ村の数人のリーダーが実際に出動して土地の測量を行ったこと、第二に、Ｈ行政村の党支部書記である胡書記の仲立ちで、道幅が拡張されることで田を潰されるＳ村の関係村民とＨ１村との間に、土地補償を含む協議書が交わされたこと［図５］、第三に、公共建設に伴う筆者らの助言もあり、道づくりを担当する「理事会」をＨ１村のリーダー、一般村民、合計10名により構成する案が村長から出されたことである。「理事会」のメンバーに入っており、会計を担当するはずの何氏の叔父に筆者は寄付金として2000元、何氏は1000元を託してから村を引き揚げた。

我々が引き揚げた後の経過について、何ＣＱが時々連絡をくれたところによれば、Ｓ村側の関係村民から反対が出たこともあって計画は滞り、2008年12月現在、Ｇ２は未だに着工されていないとのことである。

３．「社会関係資本」を規定するもの

道づくりと「社会関係資本」の関係について考える上で、以上にみた現場の文脈は、さまざまなヒントを提示してくれる。与えられた紙幅が尽きてしまい、本格的な分析は機会を改めざるを得ないが、以下、重要な二点のみに絞ってポイントを指摘しておこう。

（１）「出稼ぎ経済」

第一のポイントは、Ｈ村全体を特徴付けている「出稼ぎ経済」という農家経済の特徴が、コミュニティ全体の「社会関係資本」に与える複雑な影響である。そこにはプラスとマイナスの要素がある。

プラスの作用としては、出稼ぎからの帰還者がリーダーとなって、コミュニティの「まとまり」を刺激する側面である。別稿[7]でも論じたように、全国的な事例から見ても、道づくりの提唱者は出稼ぎなど「外地経験」をもつ個人であることが多い。実際に、工事の規模は非常に小さいものの、畦道Ｇ１補修の主体となったのはＳ村の舒医師とＨ１村出身のバイク店店主、何Ｊであり、ともに外地経験者であった。

この舗装工事は、投資額自体は非常に小さいものの、彼らがもしも完全に利己的であれば、このような少額の投資でさえ行わないはずである。さらに、２人の若い外地経験者の出会いが「故郷」の生活条件改善への気持ちをもり立て、また彼らの行為が刺激となって、Ｈ１村村民20名に２日分

の労働力を供出させたわけである。同様に、未だ着工されずにいる新道Ｇ２の建設計画について、出稼ぎ者がすべて帰省中であった春節の期間中に与論が盛り上がったことは決して偶然ではない。これらの動きが暗示しているのは、村が「まとまる」力は、異なる性質の村民、とりわけ外地経験者の「ものの見方」が在村者に刺激を与えることによる「化学反応」によって生ずるものだということだ。

次に「出稼ぎ経済」のマイナス作用があるとすれば、それは中核層である40代の村民が不在となることによる、リーダーシップの空洞化である。20～30才代の村民の多くが出稼ぎに出るのは内陸農村においては極めて一般的なことと思われる。したがって、内陸コミュニティの特質を決定づけるのは、Ｓ村とＨ１村の対比からも分かるように、40才代の村民が在村であるか否か、にある。Ｈ１村のように、20～30代ばかりか40代の男性までもが大部分、不在である村では、春節のわずかな時期を除いて、公共建設のための村内与論を盛り上げる機会が殆ど存在しないことになる。「見捨てられる道」（Ｄ）の建設計画が持ち込まれたのは、出稼ぎ者がすべて出払っている11月である。おそらく、建設の賛否を問う集会に参加することが出来たのは、自由に使える現金のない50代以上の村民ばかりであったろう。出稼ぎに出ている若い世代が決定に参加でき、村内に現金がもっとも多くプールされている春節の時期に話し合いがもたれていれば、結果は違っていた可能性もある。（Ｇ１）の補修にポケット・マネーを投じた何Ｊは貴重な出稼ぎ帰りの人材であるが、彼は完全に帰郷したというよりは、いわゆる「Ｊターン」である。彼のような人材が完全に帰郷してＨ１村在村で事業に従事することができないことと、40代村民が南昌に出稼ぎに出なければならないことは同一の要因によるものであり、つまるところＨ１村の経済的条件の悪さに絡んでいる。そしてその条件の悪さをもたらしている要因の一つが、他ならぬ「道」の問題なのである。

（２）外部資金の動向

第二のポイントとして、ポスト税費時代の財政環境の変化が挙げられる。税費改革の実施以降、とりわけ農業税が2005年に完全徹廃されてから、中部内陸農村においても公的資金が大きなファクターとなり始めている。とりわけ、現在はまだ「点」の段階に過ぎないものの、「新農村建設」のテスト・ポイントに選定されたコミュニティには、国家の資金投入が行われるようになってきており、Ｈ行政村の範囲でもＳ村、続いてＬ村と、二つの集落が選ばれている。こうした変化は、我々が中部農村を研究対象として選択した当初、仮定していた図式―完全な自力更生による公共建設―の再考を迫るものであった。

ともあれ、公的資金の投入は、それまではほぼすべて民間の力で建設・管理するよりほかなかったＨ村の「毛細血管」を二つのレベルに分化させたといえる。一つは、少しでも国家資金が入り込む「可能性の出てきた」道、つまり「毛細血管」の中でも幹線に近い上位の部分であり、我々の事例でいえば（Ｃ）や（Ｄ）である。もう一つは、農村集落につながる毛細血管の下位部分であり、当面のところは公的資金が投入される見込みがなく、村民自身もそれを期待していないような道である。（Ｅ）、（Ｆ）、（Ｇ１）、（Ｇ２）などがこれに相当する。

「毛細血管」の上位については、なまじ公的資金の導入可能性が射程に入ってきたために、村民の間には公的資金への「依頼心理」が生じた点が重要である。すなわち、（Ｄ）の事例が示しているように、工事資金を住民で一部負担するよりは、「国が100％負担してくれる日を待つ」ことを村民たちが選択するようになったと思われる。出稼ぎ経済で中核層が不在であることが、こうした心理

に拍車を掛けた。他方で、（C）の場合のように、実際に100%の公的資金が導入されて条件の整った舗装道路が開通した場合、今度はそれが毛細血管の下位部分建設について、周辺住民のモチベーションを刺激していた。そしてまた、ある集落の成功事例は口頭伝達により素早く周囲の集落にも伝わり、刺激を与える。たとえば（C）の竣工に対する予想と、Y村の「新農村建設」による村内道路整備が、Y村の住民を刺激して（E）の建設をもたらし、それがさらに隣村H１村の（G２）建設の機運を醸成するというように、外部資金の動向はコミュニティの側に連鎖的な反応を与える。

おわりに

小論では、道づくりという「目的」と、ポスト農業税時代の中部内陸農村という「文脈」に限定しながら、コミュニティの社会関係資本について考えてきた。当然ながら、「文脈」の方は日々、変化する。周知のごとく、2008年秋に世界を襲った金融危機は各方面に影響を与えているが、中国でも出稼ぎ者の帰郷潮流が始まっていると聞く。特に、H１村の南昌出稼ぎグループのような、単純労働従事者から順に農村への帰還が始まっているという。こうした新しい潮流が、中国農村コミュニティの公共建設にどのように影響してくるのか、今後の動向が注目されるところである。

［注］

1　拙稿「中国農村における開発とリーダーシップ―北京市遠郊X村の野菜卸売市場をめぐって」『アジア経済』第46巻第６号（2005年６月）。「水利施設とコミュニティ―中国山東半島C村の農地灌漑システムをめぐって」『アジア経済』第50巻第６号（2009年６月、掲載予定）を参照。

2　賀雪峰『新郷土中国』広西師範大学出版社、2004年。

3　本稿は、平成18～20年度科学研究費補助金基盤研究（C）「中国中部内陸農村の開発と社会関係資本―湖北・江西村落コミュニティの比較を通じて」（課題番号18606002、研究代表者：田原史起）による研究成果の一部である。湖北調査を阿古智子、江西調査を田原で分担し、最終成果報告においては、それぞれの知見を照らし合わせた比較分析が行われる予定である。なお、湖北X村の事例分析については、本号掲載の阿古論文を参照されたい。

4　H村にはこれまでに2006年４－５月、2006年10月、2007年６－７月、2008年３月の計４回の訪問で延べ４週間ほど滞在し、参与観察とインフォーマルな聞き取り、およびH１村の世帯調査などの方法でデータを収集した。江西地域は方言が多様であるため、毎回の滞在にはH１村出身で上海在住の何CQ氏が研究協力者として同行した。

5　佐藤寛『援助と社会関係資本―ソーシャルキャピタル論の可能性』アジア経済研究所、2001年、８－９頁。

6　余干県における2005年の「労務輸出」人口は16万5000人で、農村総人口（80万5160人）の20.5%、農村就業人口（41万1,796人）の40.1%を占める（余干県統計局編印『余干統計年鑑2006』2006年、241, 282頁）。

7　現地では「石匠」と呼ぶが、実際は標準語で言うところの「水泥匠」と同じである。

8　新農村建設の第１期目のテスト・ポイントは、SG郷全体で８つの集落が指定された。

9　拙稿「中国農村の道づくり―『つながり』・『まとまり』・リーダーシップ」高橋伸夫編『現代アジア研究第２巻　市民社会』慶応義塾大学出版社、2008年、141－144頁。